



技術の研究

牧本利夫*

80年代は技術の時代であるとも言われている。新しい技術の開発を希望し、これを期待している所が多いことを簡単に表現しているものと思っている。

大学の研究が科学および技術の発展に寄与していることは当然である。基礎的な研究に取り組んで成果を収めていることも当然である。技術の研究として、基礎的な研究の次にくるものとして、開発研究といい、あるいは試作研究という次の段階の研究が考えられる。技術の研究にはこれらの広い領域の研究が考えられ、その対応が必要である。大学においても基礎的研究の成果によって、次の発展的な新しい技術の開発を目標とした研究が重要ではなかろうか。このことは大学ではなく企業の分担とする向きもあるかもしれないが、採算を超越した開発研究も必要である。基礎研究は大学で、応用研究は企業でと簡単に割切れるものではない。技術の最先進国として世界をリードしているわが国において、若干のリスクを覚悟した新しい技術の開発研究が進められてしかるべきであり、大学における研究分担の一部でもあると考えられる。基礎研究の成果が得られた大学で、応用研究に結びつく開発研究を進めることも必要であると考

える。

このようなことを申上げると、その主旨の点から反論が出るかもしれないし、研究態勢の点から批判があるかもしれない。新しい技術を誕生させるのに最後までその面倒を見ることが必要であろう。大学の内外の協力によって、そのような研究態勢を作らなければならないことは勿論である。

これらの研究には当然に研究費が必要である。大学は研究費の手当を自分ではできない。所詮は外部からの補助をあおがなければならない。いわゆる脚光をあびている研究、プロジェクトに組み込まれている研究には、研究費の補助を集めやすいのは当然である。地味ではあるが新しい革新的な技術の“種”となる研究成果が多くあるように思われるが、これにはなぜか冷い所が多く見られるように思われる。もちろんその“種”を見定めることが必要な要件ではあろうが、時流に乗るもののみに限らず、地道な研究の成果をこそ引延していかなければならない。研究費の配分の点においても、これらのことが議論されてしかるべきであると考え。新しい革新的な技術として社会に有用となるまで育て上げる最後の努力もその基礎となる研究成果を収めた大学において分担する必要があるのではなかろうか。

*牧本利夫 (Toshio MAKIMOTO), 摂南大学, 電気工学科, 教授. (大阪大学名誉教授) 工学博士, 通信工学